

研究論文

老年看護学における看護学生が捉えた高齢者イメージの変化

—2年次から3年次の分析を中心に—

岡本 麗子・榊原 千佐子・小堀 ゆかり・高岡 哲子

(2011年1月17日受稿)

抄録： 本研究の目的は、学内で行われた老年看護学領域の講義3教科の授業構築が、学生の高齢者イメージ変化に対してどう影響を及ぼしたかを明かし、老年看護学の学習効果を検討することを目的とした。研究対象は、2008年に入学した看護学生の3年生の内59名であった。

対象者が高齢者とする年齢と高齢者イメージの変化を、3教科が終了する毎に調査した。この結果、対象者が高齢者とする年齢は、最終科目にて初回科目より有意に年齢が上昇していた。また、イメージされる自由記述内容の変化はみられなかったが、回答数において初回科目とその他の科目で有意に回答数が上昇していた。

高齢者イメージが、援助者自身の姿勢やケアの内容に影響を及ぼすとされる中で、老年看護学の授業構築において、学生の高齢者イメージの幅を広げていることが示唆された。しかし、高齢者のできる力を着目し肯定的な側面をさらに広く捉えることへの課題も示唆された。

I. はじめに

人々の寿命が延び、平成22年度版高齢社会白書によると、我が国の5人に1人が65歳以上の高齢社会を迎えている¹⁾。高齢化の状況の変化と共に、高齢者にとっての社会環境も著しく変化し続けている。更に、超高齢社会を迎えるにあたって、高齢者の健康維持は元より、生活全般ともすれば、「生きる」という人間の根源的なものに対する質の向上についての関心が高まっており、これに対応すべく社会システムの構築が急がれている。

以前の社会風潮は、いかに平均寿命を延ばすかという感覚であったが、そもそも平均寿命とは、現在の年齢別死亡率が今後も変化しないと仮定したとき、ある年齢からの期待生存年数を計算した値である。すなわち、今、生まれたばかりの子供が、何も無ければここまで生きられるであろうと予測された年月のことである。これは、生物体の命の

みを指しており、そこに、その人が生きる時間や空間、関係性、存在価値や自己確立といった質に関する側面は全く含まれていない。しかし、人は自立して健康に生活することを誰もが望むものであるからこそ、世間一般においても、健康寿命という言葉が周知されるようになってきている。

健康寿命から導かれる「健康」とは、単に身体的健康を指すわけではない。健康の要素は、身体的、心理精神的、社会的、文化的、生活史的、霊的な健康の要素があり、その人が生活を営むそれぞれの国、環境、場において、トータルにバランスがとれていることが「健康」であるとWHOの健康定義の改正案から解釈される。

看護師は、この「健康」に寄与する職種である。ことに、老年看護は、老人ゆえのリスク（老化と複合する病気像、不完全な回復、またそれらと闘い、自立した生活を営むには不足する潜在力と時間）をもった人々を対象とし、その個々人にふさ

わしい援助をすることであると中島(2006)は述べている²⁾。さらに、その援助とは、その老人の生命と日常生活活動にとって必要なこと、まだ働けるものを選びとりサポートすることで、生命と生活を維持し、目ざしうる望ましい態様を獲得していく看護活動であるとも述べている。これは、実に広い視点での対象理解ができてこそ成し得る援助であり、WHOが提唱する健康要素の全てを網羅し、全人的な対象理解の上で提供される看護援助ととらえられる。

それゆえ、老年看護学領域においては、看護の対象者を生活者としての高齢者として捉え、出来る事と出来ない事を明確にし、できる力を最大限に引き出しながら、健康と豊かさに満ちた生き様をつくりだされるための援助が考えられ実施できることを最終目標として、2年次より授業を構築している。

また、高齢者の看護援助を行う場合、高齢者に対して肯定的な老人観をもつことも重要である。それは、老人観の形成は、高齢者のイメージが基礎となり日常の体験や学習によって具体的なものの見方として形成される³⁾からである。更に、肯定的なイメージは肯定的態度や行動を起こさせ、否定的イメージは行動を規制する⁴⁾とされ、滝川らも、行動はイメージに依存するとしている⁵⁾と述べており、高齢者に対する援助を行う際は、援助者が持つ老人イメージや老人観が、援助者自身の姿勢やケアの内容に影響を及ぼす⁶⁻⁸⁾と言われている。

イメージが援助へ影響すると言われる中で、保坂と袖井は「大学生が抱く老人イメージは、どちらかといえば否定的である。」⁹⁾と述べているほか、看護学生が老人に対して否定的なイメージを持つ者が多い¹⁰⁻¹³⁾と報告されている。高齢者へ看護援助を提供する場合、この既存の否定的なイメージが態度行動に影響を及ぼすことは最小限にしたい。そのためには、看護者のもつ老人イメージは看護に取り組む姿勢を形成する源となり、看護の質・内容に影響を及ぼす¹⁴⁾ことから、看

護学生達の高齢者のイメージを把握するとともに、肯定的なイメージを基に関わりを持るという事も、老年看護学領域全体としての目標としている。

看護学生の高齢者イメージの先行研究は、SD法を用いた高齢者イメージの調査研究^{14,15)}や、イメージマップ分析による看護学生の高齢者イメージ分析をした研究¹⁶⁾、老年看護学実習前後における高齢者イメージの変化についての研究^{17,18)}はみられるが、大学教育における老年看護学領域の授業構築過程に沿った学生の高齢者イメージの変化を研究したものは少ない。

Ⅱ. 目的

本学の老年看護学領域のカリキュラムは、2年次前期より老年看護学概論が開始され、2年次後期に老年看護学健康論、3年次前期に老年看護学援助論を開講し、それまで蓄積された知識を基にペーパー事例を用いて老年看護過程を展開する。そして、3年次後期に老年看護学Ⅰ実習において、実際に高齢者と関わりを持った上で自己の高齢者観を確認し、4年次前期に老年看護学Ⅱ実習にて、看護過程の展開から看護援助の実施評価を行っている。

本研究は、老年看護学概論、老年看護学健康論、老年看護学援助論の各15回の講義終了後、学生の高齢者イメージがどの様に変化したかを明らかにし、老年看護学の教育内容とその授業構築について示唆を得るために行った。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象

2008年に入学した本学看護学科の3年生89名を調査対象とし、有効標本数は3回全ての調査で回答が得られた者59名(66.2%)であった。

2. 調査方法

調査時期は、老年看護学概論終了時の第1回調査は2009年7月、老年看護学健康論終了時の第

2回調査は2009年12月、老年看護学援助論終了時の第3回調査は2010年7月に行った。

調査方法は、自記式調査票を配布、集合調査法で実施し、その場で回収した。調査時間は10分とした。

3. 調査内容

1) 学生が高齢者と考える年齢について。“あなたは高齢者を何歳からだと思いますか。()歳から。”という質問文に対して回答を得た。

2) 学生が高齢者という言葉からイメージすることについて。“現在、あなたが感じている高齢者像を()内に具体的に書いて下さい。例：高齢者は(病気になりやすい人)である。”という質問文の括弧内への自由記述式とした。また、“高齢者は()である。”という質問文は、調査表の中に、50題表記した。

4. 分析方法

学生が高齢者と考える年齢について、高齢者のイメージを回答した個数、及びイメージ内容をカテゴリー化し分散分析を行うにあたっては、アメリカ合衆国のMathWorks社が開発している数値解析ソフトウェアMATLAB (マトラボ) を用いて統計解析を行った。また、高齢者をイメージする言葉についてのカテゴリー化にあたっては、共同研究者間でカテゴリーと意味内容について討議し合意をはかった。

5. 対象者の属性

分析対象となった学生59名の内訳は、女性50

名 男性9名であった。高齢者との関わりで、誰とのエピソードが印象に残っているかという質問から、祖母が18名(30.5%)、祖父が13名(22.0%)、祖父母が7名(11.8%)、他人が17名(28.8%)、その他4名(祖父の姉・校長など)(6%)という背景を持っていた。

6. 倫理的配慮

調査対象者全員に、本研究の目的、研究協力についての自由意志、調査内容は統計的に処理すること、個人の成績にはまったく影響しないこと、個人名が特定されない事を説明した。その上で、研究に同意する意思のある学生に調査票の提出を求めた。

IV. 結果

1. 高齢者と考える年齢について

老年看護学概論後(以後1回目と表記)の調査では、高齢者と考える年齢について平均値67.0歳(S.D.±6.27)と回答し、老年看護学健康論後(以後2回目と表記)の調査では平均値67.8歳(S.D.±4.96)、老年看護学援助論後(以後3回目と表記)の調査では平均値68.06歳(S.D.±5.55)であった。

Bartlett検定を行った結果、各群の分散は均一であることがわかった。そこで繰り返しのない二元配置分散分析を行った。

高齢者と考える年齢について、年齢ごとに差があるかどうか分散分析をおこなった結果、年齢の主効果が有意だった($F(2,112) = 4.38, p < .01$)。分散分析表を表1に示す。

表1 年齢における分散分析表

Source	SS	df	MS	F	Prob>F
Columns	138.6082	2	69.30409	4.38025	0.014737
Rows	3666.994	56	65.48204	4.138683	8.34e-11
Error	1772.058	112	15.82195		
Total	5577.661	170			

次に、年齢の主効果に関して、Tukey-Kramer法による多重比較をおこなった結果、1回目と3回目に5%水準で有意差がみられた。

多重比較表を表2に示す。

表3は、平均推定値と標準誤差を以下に示す。第1列は各グループの平均の推定値、第2列はそれらの標準誤差である。

結果を図1に示す。信頼区間に0が含まれなければ、2群の平均値の差は有意である。よって看護学概論後と看護学援助論後の高齢者とする年齢において、3科目受講後において、高齢者とする年齢が有意に上昇したことが示された。

2. 高齢者のイメージ記述の回答回数について

各調査の回答回数は、1回目の平均回答回数は15個(S.D.±5.91)、2回目の平均回答回数は22個(S.D.±9.99)、3回目の平均回答回数は21個(S.D.±9.20)であった。

Bartlett検定を行った結果、各群の分散は均一でないことがわかった。そこでKruskal-Wallis検定をおこなった。

P値は2.02599e-05であった。p<.05にて各群に差があることが示された。

分散分析表を表4に示す。

表2 年齢の主効果における多重比較表

比較する群 (A)	比較する群 (B)	信頼区間下限	2群の平均値の差	信頼区間上限
概論後	健康論後	-3.0680	-1.2982	0.4715
概論後	援助論後	-3.9628	-2.1930	-0.4232
健康論後	援助論	-2.6645	-0.8947	0.8751

表3 年齢の平均推定値と標準誤差

	平均推定値	標準誤差
概論後	66.5088	0.5269
健康論後	67.8070	0.5269
援助論後	68.7018	0.5269

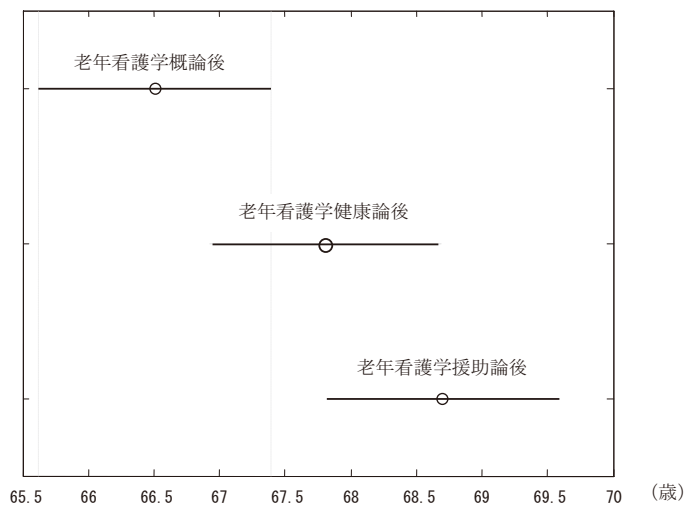


図1 3教科講義後の高齢者とする年齢変化

表4 イメージ回答数における分散分析表

Source	SS	df	MS	Chi-sq	Prob>Chi-sq
Columns	56662.2	2	28331.1	21.61	2.02599e-05
Error	404736.3	174	2326.1		
Total	461398.5	176			

分散分析の結果を基に多重比較 (Tukey-Kramer 法) をおこなった。multcompare関数を用いて以下を実行した。多重比較表を表5に示す。

表5 イメージ回答数の主効果における多重比較表

比較する群 (A)	比較する群 (B)	信頼区間下限	2群の平均値の差	信頼区間上限
概論後	健康論後	-62.3651	-40.2712	-18.1773
概論後	援助論後	-57.2041	-35.1102	-13.0162
健康論後	援助論後	-16.9329	5.1610	27.2549

平均推定値と標準誤差を表6に示す。

表6 イメージ回答数の平均推定値と標準誤差

	平均推定値	標準誤差
概論後	63.8729	6.6659
健康論後	104.1441	6.6659
援助論後	98.9831	6.6659

結果を図2に示す。老年看護学概論後と老年看護学健康論後、及び老年看護学概論後と老年看護学援助論後のイメージ回答数が有意に上昇したことが示唆された。

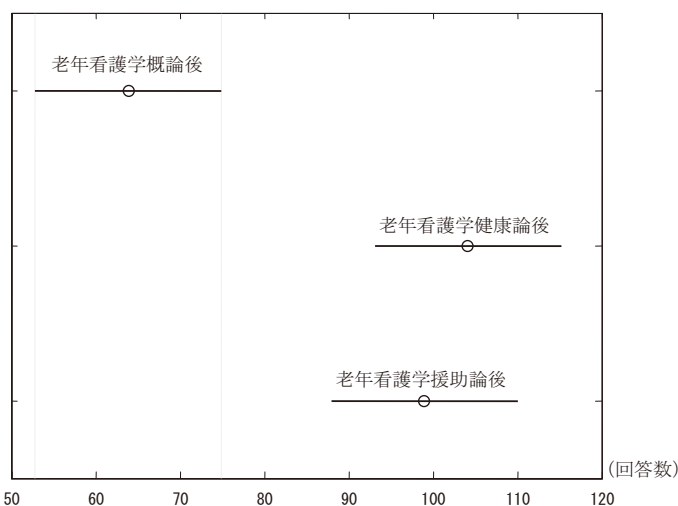


図2 教科講義後の高齢者イメージ回答数の変化

3. 高齢者イメージの内容について

高齢者イメージの自由記述について、回答個数の報告を先にしたが、その中で最初にイメージされる5つを抽出し分析対象とした。

イメージの自由記述について71個のサブカテゴリーに分類された。さらに、それらを【身体に関する肯定的な側面】を「1」、【身体に関する否定的な側面】を「2」、【社会背景に関する肯定的な側面】を「3」、【社会背景に関する否定的な側面】を「4」、【精神・心理に関する肯定的な側面】を「5」、【精神・心理に関する否定的な側面】を「6」とコード化した。また、コード化にあたっては研究の過程で再度見直しを行い、3つのどの側面にも分類されるものを【個性の重視】とし「7」とした。

サブカテゴリーの内容については表7に示す。各カテゴリコードの個数は表8の通りである。これらについてKruskal-Wallis検定をおこなった。

P値は0.9771であった。p>.05にて、各群に差がないことがわかった。

表8 イメージ記述内容のコード毎回答数

コード	老年看護学概論	老年看護学健康論	老年看護学援助論
1	22	21	13
2	75	90	109
3	49	36	20
4	13	12	2
5	103	106	99
6	14	15	29
7	4	0	8

分散分析表を表9に示す。

表9 イメージ記述のカテゴリー化後の分散分析表

Source	SS	df	MS	Chi-sq	Prob>Chi-sq
Columns	1.7857	2	0.8929	0.0464	0.9771
Error	767.7143	18	42.6508		
Total	769.5000	20			

3回の授業後、高齢者イメージを自由記述した際に想起されやすいものについて、その内容構成(身体的側面 [肯定的・否定的]・社会的側面 [肯定的・否定的]・精神心理的側面 [肯定的・否定的]) についての変化はみられなかった。

V. 考察

1. 看護学生が捉えた高齢者の年齢

一般大学生を対象とした調査⁹⁾では、対象者のほとんどが高齢者とする年齢を65歳から79歳までとしている。本調査においても67.0歳(S.D.±6.27)から68.6歳(S.D.±5.55)であり、一般大学生と大きな差がないといえる。その中で、老年看護学概論から老年看護学援助論の積み重ねを通して高齢者とする年齢は上昇した。これは、厚生労働省の高齢者の定義において、前期高齢者を65歳から74歳としているため、祖父母など的高齢者との同居や実生活における関わりが少ないため、授業構築前半において若く表わされ、授業の構築過程の中で、元気老人から虚弱老人までの幅広い老人像を教授したことによって変化したのではないかと考える。対象の学生は、援助を必要としない高齢者との関わりから高齢者の年齢を低く捉えていたが、授業の中でペーパー・ペイシェント教材を用いた事例が援助を必要としている後期高齢者であったことにより、高齢者として捉えた年齢が高くなったと考える。調査前高齢者とする年齢が上昇したことは、全人的な対象理解に寄与していくものと考えられる。なぜならば、高齢者は個々人のライフスタイルや加齢による変化、生活史や役割、生きがい、健康状態など非常に多

様性に富んだ存在である¹⁹⁾。したがって、イメージする年齢が上昇したことにより、看護の対象者である高齢者の現実的かつ多様性に富んだ人間像を理解しやすくしていることがうかがわれる。

2. 高齢者のイメージ記述の変化

老年看護学概論後とその後の2教科終了後の調査において、回答数が有意に上昇した。これは、老年看護学概論においては、高齢者とはどのような存在かという概念と高齢者を取り巻く社会環境や持ち合す高齢者観をグループワークの中でKJ法を基に思考をまとめあげていた。2年次後期はその知識をベースに、高齢者が罹患しやすい疾患とそこに関わる看護の実際と、老年看護過程を考えるための基礎となる生活行動要素を中心とした看護の視点の持ち方を教授した。その上で、心不全に罹患し在宅看護を受けながら最期を迎える86歳女性の映像教材から、対象者のもてる力に着目しながら、身体的・社会的・心理霊的側面の情報収集を行う演習を行い、看護実践につなげる思考を整理した。さらに、3年次前期の老年看護学援助論において、脳梗塞に罹患した84歳男性のペーパー・ペイシェントを基に看護過程を展開し、計画実施に向けて学生間でその場面を再現しながら看護援助の実施をした。これらの授業での実践が、実際の高齢者との関わりが少ない看護学生の高齢者イメージの幅を広げたものと考えられる。

高齢者のイメージ内容自体に変化はみられなかったものの、自ら言語化される高齢者イメージ表現数が増えたということは、より大きな引き出しをもって対象者と向き合えることにつながるの

ではないだろうか。高齢者イメージこそ、人の行動の目標となり、行動を指導し制御するもの²⁰⁾であるならば、その高齢者イメージの広がりや、看護援助の奥行きを深め、その援助の深さから、ともすれば高齢者のQOL向上へ寄与することへと発展する可能性を持ち備えたことになると示唆される。

ただし、3教科終了後の身体的・社会的・精神心理的側面と各々にある肯定的側面と否定的側面における内容は、それぞれで変化がみられなかった。身体的側面において否定的側面からのイメージ想起が多いことは、日常生活動作においてネガティブなイメージを抱く可能性が否めない。それは、高齢者との関わり実体験が少なく、テレビなどのメディアから得る情報に、イメージが先行しているとも受け取れる。柿川と金井は、「テレビは、われわれの日常生活に深く浸透し、さまざまな事柄についてわれわれの考え方や感じ方に影響を与えている。子どもたちは、ブラウン管に映し出される老人の姿を、本当とは違うものとしてではなく、それをあたかも現実であると受け止めてしまう。」²¹⁾と述べており、高齢者と一緒に暮らしたことのない学生が増える現代社会の中では、高齢者に対するイメージ形成に果たすマスメディアの役割も大きいといえる。高齢者との関わりの実体験が少なくメディアからの影響を受けやすいとするならば、だからこそ、授業デザインでは、高齢者と実際に関わりがもてる単元を企画する必要性が高いと考える。そうすることによって、肯定的な身体的側面のイメージがより膨らみ、日常生活動作を看護の視点を持って見る上で、高齢者のもてる力を発見しやすくなることにつながれると考える。また、本研究においては、精神・心理に関する肯定的な側面の回答数が多く、看護者としてひとを思い浮かべた時、単に身体的側面に重きが置かれていないことも示唆された。WHOが提唱するように健康本来の意味を考えた時、健康の要素は、身体的、心理精神的、社会的、文化的、生活史的、霊的な健康の要素があり、それらがトー

タルにバランスがとれていることが「健康」であるが如く、これら全ての要素において、そのイメージの幅を広げるような老年看護学全体としての授業構築としなければならない課題が明らかとなった。

3. 研究の限界

今回の調査では、1期生のみでの集団調査でありその内容に偏りがあると考えられる。今後は、更に他学年の検討を考慮する必要がある。また、今回の分析では、調査対象者の高齢者との同居経験の有無などの学生の背景の差による変化の違いなどについては検討しなかった。また、授業構築過程だけではなく、その後の実習参加後の高齢者のイメージ変化も把握する必要がある。さらに、授業構築過程の他、自己学習や高齢者を取り上げた書物やメディアなどがイメージの変化に実際はどう影響するのか明らかにする必要もあるであろう。これらについて今後の継続課題として取組んでいきたい。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 内閣府：平成22年度版高齢社会白書（概要版）、2-5、東京、人権教育啓発推進センター、2010.
- 2) 中村紀恵子他：系統看護学講座 専門20 老年看護学、80、東京、医学書院、2008.
- 3) 薬師寺文子、川崎裕美、森田愛子、櫛原登志子：効果的な老人理解に関する看護教育方法の検討—学生のイメージをベースとした実習指導案—、広島県立保健福祉短期大学紀要4（1）：35-45、1999.
- 4) 松下昌子他：看護学生の老人イメージ—日本とスウェーデンの比較—、看護展望、22（7）：828、1997.

- 5) 滝川由美子, 吉本知恵, 横川絹恵: 看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較—, 香川県立医療短期大学紀要, 1: 51-60, 1999.
- 6) 古谷野亘他: 中高年の老人イメージSD法による測定, 老年社会学, 18 (2): 147-152, 1997.
- 7) 寺島喜代子: 看護過程展開における学生経口ペーパー・ペイシエントを用いた学内実習より, 福井県立看護短期大学研究紀要, 16: 153-160, 1991.
- 8) 梶谷みゆき, 倉鋪桂子: 看護学生の老人イメージに関する研究. 島根県立看護短期大学紀要, 5: 101-107, 2000.
- 9) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ—SD法による分析—, 社会老年学, 27: 22-33, 1988.
- 10) 小泉美佐子, 上本淳子: 看護学生の老人イメージ, 筑波医療技術短期大学研究報告, 11: 33-39, 1990.
- 11) 吉田正子, 西川千歳, 中野悦子, 金川浩美, 丁野みどり, 久山奈保子: 看護学生の老人イメージに関する研究, 神戸市立看護短期大学紀要, 11: 55-62, 1992.
- 12) 吉尾千世子, 片桐美智子: 看護学生の老人に対するイメージ変化, 順天堂医療技術短期大学紀要, 4: 43-49, 1993.
- 13) 斉藤京子, 藤井博英, 小坂信子, 佐藤ヨシ, 佐々木昌子: 看護学生の老人に対するイメージ—同居体験の有無による比較—, 看護教育の研究, 10: 222-231, 1994.
- 14) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦端枝, 白井由里子: 看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に—老年看護学, 4 (1): 98-104, 1999.
- 15) 桂晶子, 佐藤このみ: 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ, 宮城大学看護学部紀要, 11 (1): 49-56, 2008.
- 16) 中村真理子, 服部紀子, 横島啓子: 老年看護学実習後の高齢者イメージ—老人イメージマップの連想言語から—, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 12: 18-29, 2003.
- 17) 笠井京子, 吉村陽子, 寺島喜代子: 臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化, 福井県立大学論集 23: 107-116, 2004.
- 18) 木村誠子, 片岡万里: 看護学生の老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性—一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較—, 高知大学学術研究報告, 55: 37-43, 2006.
- 19) 守本とも子: 看護学実践 老年看護学, 53-58, 東京, Pilar Press, 2007.
- 20) 藤岡喜愛: イメージその全体像を考える, 3, 東京, NHK出版会, 1985.
- 21) 柿川房子, 金井和子: 新時代に求められる老年看護, 62, 東京, 日総研出版, 2000.

表7 高齢者イメージのコード番号とサブカテゴリー

	[コード番号]	[サブカテゴリー]	
【身体に関する側面】	肯定的 (1)	健康を管理する	料理上手
		元気	自立して生活している
		できる力がある	生活観がある
		生活の無限の可能性がある	早寝早起き
	否定的 (2)	規則正しい生活をする	
		歩くのが遅い	咀嚼力の低下
		筋力低下	セルフケア能力が低下
		記憶力が低下	やる気がなくなっている
【社会的側面】	肯定的 (3)	視力低下 眼鏡使用	認知症になりやすい
		聴力低下	白髪
		人づきあいをする	おしゃれ
		おしゃべりが好き	戦争体験
	否定的 (4)	社交的	おじいちゃん・おばあちゃん
		夫や妻、家族との結びつきが強い	お茶
		人をもてなすのが好き	介護保険
		時間がある	年金
【精神・心理に関する側面】	肯定的 (5)	子供が好き	お金持ち
		孫を可愛がる	趣味・生きがいがある
		独居	偏見
		寂しそう	汚い
		家族・地域からの支援が必要	人をすぐ頼る
		感性豊か	人生に誇りをもっている
	否定的 (6)	優しい	自分の問題と向き合っている
		あったかい	未来の自分の姿
		心穏やか	自分の世界観を持っている
		明るい	自己の価値観を持っている
		知恵を沢山持っている	自分らしく生きる
		人生経験が豊か	自尊心がつよい
	工夫ができる	アイデンティティが確立している	
	今まで頑張ってきた	人生の歴史がある	
	尊敬されるべき存在	辛い時代を生き抜いた	
	人生の先輩	自分を肯定的に考える	
	成長・成熟・発達している	人生を謳歌している	
	遠慮がち	口うるさい	
頑固	うつ		
せっかち	こだわりが強い		

*コード番号 (7) 【個別性の重視】

Change in Thoughts about the Elderly People that Gerontological Nursing Students Hold —Analysis of the Second and Third Year Students —

OKAMOTO Reiko, SAKAKIBARA Chisako, KOHEI Yukari and TAKAOKA Tethuko

Abstract: The objectives of this study are to describe how the structure of the curriculum for three university courses in gerontological nursing has affected how nursing students think about the elderly people, and if this in turn influenced how they performed gerontological nursing. Subjects for the study were 59 third year nursing students who had entered the school in 2008.

Changes in how the students perceived the elderly and how old they estimated the elderly to be were described at the end of each of the three courses. As a result, the ages at which the students assumed the elderly people to be had risen significantly by the end of the final course, when compared to the first course. Further, regarding the nursing students' thoughts about the elderly, there were no clear changes in the free descriptive answers; however, compared to the first course, the response rate had risen significantly by the end of the second and final courses.

It is widely understood that how nursing students perceive the elderly is assumed to affect the style and quality of care provided. Findings from this study suggest that the structure of the curriculum in gerontological nursing contributes to expanding nursing students' thoughts about the elderly; although, it is necessary to strive to understand how to emphasize the positive aspects of the elderly by focusing on what the elderly can do by themselves.